



令和8年10月30日

報道関係者各位

国立大学法人北海道国立大学機構
帯広畜産大学

歴史的建造物を活かす博物館の新たな枠組み「フレキシブル・キューブ」を提唱

【リリース概要】

帯広畜産大学人間科学研究部門の木村文准教授は、歴史的建造物を転用した博物館の展示空間を捉える新たな枠組みとして、「フレキシブル・キューブ」を提唱しました。本研究では、デジタル時代において博物館を実際に訪れ、展示を体験することにどのような独自の価値があるのかを検討しました。

リトアニアの首都ヴィリニウスにあるリトアニア国立博物館「歴史の家」は、18世紀の邸宅を転用した施設です。本研究では、同館の同じ展示室で開催された2つの展覧会を比較・分析しました。その結果、先行研究で提唱されていたような歴史的建造物は中立的な「容れ物」でも、決まった順路を強いる装置でもないことが分かりました。建物は展示ごとに異なる形で関わる「共著者」として機能していました。フレキシブル・キューブとは、こうした建物と学芸員の判断との間に生まれる関係を指す概念です。

【解説】

多くの博物館は、宮殿や教会、工場など、別の目的で建てられた建物を使っています。博物館空間をめぐるっては、2つの古典的な議論が知られてきました。1つはオドハティの「ホワイト・キューブ」論で、白い壁の展示空間が建物の個性を消して中立を装うことを批判したものです。もう1つはダンカンの「儀礼の筋書き」論で、建築が来館者の動きを決められた順序に導くと論じたものです。しかし、どちらの議論も、転用された歴史的建造物において、異なる性格の展覧会が開催される状況を十分に捉えていませんでした。

本研究の対象は「歴史の家」の2階展示ホールです。ここには18世紀当時のアーチ状の開口部と、2行3列に配置された6つの部屋からなる構造が残されています。この同じ空間で、2つの展覧会が開催されました。1つは「パリ万博の波に乗って」（2025年11月～2026年8月）で、パリで開催された3回にの万国展覧会を年代順にたどる一方向の順路が設けられていました。展示ケースや木製の柱で来館者を導き、アーチを部分的にふさいでいました。もう1つは、その半年前に開催された「歴史がしっぽを振る」（2025年4月～10月）です。人と犬の関係をテーマ別に扱い、アーチを開放し、展示ケースを斜めに配置して、来館者が自由に回遊できる構成でした。

現地調査、写真、平面図スケッチによる分析から、主に3つの知見が得られました。第一に、建物に手を加えなくても、学芸員の判断によって正反対の動線が実現されていました。第二に、従来の2つの議論を修正する必要があることが示されました。建物の個性を消す「ホワイト・キューブ」は、歴史的

建造物の博物館が選ばないこともできる選択肢になっています。また、来館者の順路は建築に固定されたものではなく、学芸員が組み立てるものだといえます。第三に、デジタル展示と実物の博物館の違いが示されました。デジタル展示は画面の構成によって来館者の「注意」を方向づけます。これに対して歴史的建造物は、部屋の境界を越える「身体」の移動を通じて体験を形づくりします。

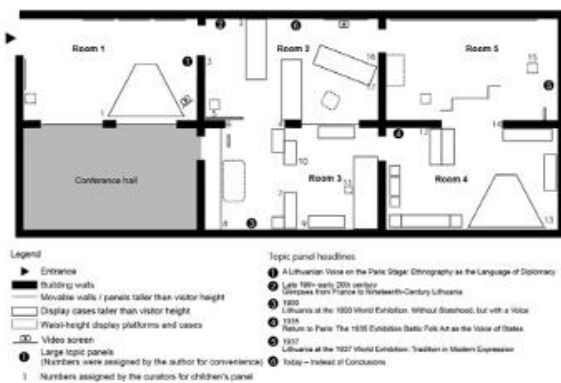


Figure 2. Floor plan of Riding the Wave of Paris Exhibitions (November 26, 2025–August 2, 2026). Floor-to-ceiling vitrines and free-standing wooden columns channel visitors along a one-way chronological path; arched openings are selectively blocked to close lateral shortcuts. Sketch by the author.



Figure 6. Floor plan of History Wags Its Tail (April 30–October 26, 2025). Arches remain mostly open, and central vitrines stand at slight angles to the rectangular axis, generating informal zones that permit dispersed rather than sequential circulation. Sketch by the author.

図 展覧会の平面図（論文に掲載の Figure 2 と Figure 6）

【研究の意義】

フレキシブル・キューブは、「ホワイト・キューブ」に代わり、歴史的建造物の転用が進む現代の博物館空間を捉える枠組みです。教会、工場、駅舎などを転用した博物館は世界的に増えています。本研究は、そうした博物館が建物の制約を「克服すべき障害」ではなく「展示の素材」として活かすための視点を提供します。また、「博物館はデジタル時代を生き残れるか」という問いを、「それぞれのメディアが博物館体験をどう枠づけるか」という問いへと捉え直すものでもあります。今後は、他の歴史的建造物の博物館やより多くの展覧会での検証を通じて、この枠組みのさらなる発展が期待されます。

【発表雑誌】

Public Humanities, Volume 2, e184 (2026): 1-12

論文 DOI: <https://doi.org/10.1017/pub.2026.10289>

掲載日: 2026 年 10 月 26 日

（本論文はオープンアクセスで全文公開されています。）

【論文名】

Historical Museums as Flexible Cubes: Inherited Buildings and Curatorial Decisions

【著者】

木村 文 帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

【特記事項】

本研究は、日本学術振興会科研費基盤研究（若手）23K12317 の助成を受けて実施されました。

【連絡先】

帯広畜産大学 人間科学研究部門 准教授

木村 文

TEL: 0155-49-5603

E-mail: akimura@obihiro.ac.jp